

日本英学史学会 中国・四国支部

ニューズレター

No.60

Historical Society of English Studies in Japan, Chugoku-Shikoku Chapter

巻頭エッセイ

日本英学史学会第46回全国大会に参加して

田村道美

本年度の日本英学史学会は10月10日から12日にわたって、東京の明治学院大学で開催されました。周知のとおり、アメリカ長老教会の宣教医師として来日したヘボンの妻クララが1863年に開設したヘボン塾が、明治学院大学の淵源であります。

学会初日には、二つの講演、「米国長老・改革協会派遣宣教師たちの仕事—ヘボン、ブラウン、フルベッキ 他—」(明治学院大学長 大西晴樹)と「ヘボン塾およびヘボン塾につらなる人々」(明治学院歴史資料館 原 豊)があり、ヘボンやクララが日本に残した足跡をより深く知ることができました。

講演後に、明治学院大学図書館の松岡良樹氏より、同大学図書館の『和英語林集成』デジタル・アーカイブの利用法についての説明がありました。氏によれば、同アーカイブを利用すると、『和英語林集成』の「手稿」「初版」「再版」「三版」「NY版」「上海版」「縮約丸善版」「日盛館偽版」「東洋堂偽版」「ロンドン版」という11種の版を見ることができ、各版における異同等が一目瞭然とわかります。会員の方々に同アーカイブの活用をお薦めいたします。

2日目の研究発表では、本支部会員の松村幹男先生が「雑誌『英語教育』について—昭和戦前期英語教育史研究—」を、竹中龍範支部長が「J. M. Dixon『英和日本学校用会話』をめぐって」を発表されました。松村先生は雑誌『英語教育』の多彩な内容を紹介されながら、同誌が昭和10年代の英語教育史研究上きわめて重要な資料であることを説かれました。竹中先生は『英和日本学校用会話』の学校生活全般に及ぶトピックの中から、「教室英語」的要素が集約されて、楠原銚太郎『学生用英和教場会話』へと繋がっていく過程を貴重な資料を基に論証されました。

3日目の横浜開港資料館と横浜の英学塾跡見学会には参加できませんでしたが、今回も多くのことを学ぶことのできた有意義な大会であったことを記して報告いたします。

(香川大学 / 日本英学史学会中国・四国支部副支部長)

平成 21 年度 第 2 回 (通算 61 回) 研究例会のご案内

本年度第 2 回 (通算第 61 回) 研究例会を、来る 12 月 12 日 (土) に岡山県高梁市にて開催する運びとなりました。開催にあたり、理事の能登原昭夫先生には格別のご配慮を賜りました。心より篤くお礼申し上げます。

「キリスト教と日本の英学」の歴史を伝える高梁の地を訪ねる今回の例会では、郷土史家の高見彰先生によるご講演「備中高梁における英学事情」、および会員による研究発表 5 本が予定されています。会員の皆様にはぜひ高梁の地にご参集いただきますよう、ご案内申し上げます。

恒例にしたがって今回も、研究例会のあとに忘年懇親会を企画いたしております。こちらの方へも多くの皆様のご参加をお待ちしております。

高梁研究例会プログラム

日時： 2009 年 12 月 12 日 (土) 13:00～17:00 (受付 12:30～)

会場： 高梁市文化交流館 3 階 第 1 講座室

〒716-0043 岡山県高梁市原田北町 1203-1 TEL: 0866-21-0180 FAX: 0866-22-5544

開会行事 (13:00～13:10) 支部長挨拶

講演 (13:10～14:10)

備中高梁における英学事情—(備中松山藩を動かした一通の手紙)—

講師 郷土史家 高見 彰 先生

司会および講師紹介 能登原 昭夫(元 山陽学園大学)

—(休憩 5 分)—

研究発表 (14:15～14:45)

「条約改正」と communicate (通知する)

中村浩路(元 岡山商科大学)

研究発表 (14:45～15:15)

岡山県商業学校の設立と初代校長小田堅立

齊藤泰成(岡山東商業高等学校)

研究発表 (15:15～15:45)

ロマン・ロランの「序文」—仏語版『出家とその弟子』への—

野村勝美(本学会会員)

—(休憩 5 分)—

研究発表 (15:50～16:20)

広島高等師範学校入学試験英語問題にチャレンジ!

田中正道(広島大学名誉教授)

研究発表 (16:20～16:50)

H. D. Leland に関する研究：岩国中学校での教育実践を中心に

保坂芳男(立命館大学)

閉会行事 (16:50～17:00) 副支部長挨拶、写真撮影

懇親忘年会 (17:30～19:30) (JR 備中高梁駅近くの会場を予定、会費 5,000 円程度)

講演および研究発表の概要は次ページをご参照ください。

備中高梁における英学事情—(備中松山藩を動かした一通の手紙)—

高見 彰

三島中洲(山田方谷の弟子)が備中松山藩山田方谷宛に書いた手紙には、外洋を走る帆船の購入を勧めること、オランダ語から英学へ切り替えるため松山藩から江戸へ出ていた医学生を堀達之助のもとへ入門させたことなどが書かれている。この帆船購入に踏み切ったことで、新島襄が函館から密出国出来たこと(この船で江戸から函館に向っている)、明治13年新島が備中高梁を訪問した事がその後の高梁の発展に大きな影響を与えていること、英学の発展にも寄与していることなどにふれてみたい。

「条約改正」と communicate (通知する)

中村 浩路

[世外井上公傳第3巻][我が改正法律を外国語に翻訳し、之を外国政府へ通知するといふ事に関して問題が起つた。(略)「法典及び規則を外国政府に通知する真正の目的は如何。」との問に対し、公は、「日本政府ノ編纂スベキ法典規則ヲ外国政府ニ通知スルハ、外国政府ヲシテ之ヲ知ラシメンガ為メナリ」と明答した。]しかしこの communicate 1語がもとで井上外務大臣辞職、第一次伊藤内閣は瓦解してしまったのだ。(下線 中村)

岡山県商業学校の設立と初代校長小田堅立

— 岡山県における明治30年代からの商業学校教育の内容と英語教師としての小田堅立の功績 —

齊藤 泰成

明治31(1898)年に創立された岡山県商業学校(現・岡山県立岡山東商業高等学校)の英語教育は1年次に週8時間もの授業がなされ、卒業式では卒業生代表が20分以上もの答辞を暗誦して英語でおこなったという記録があるほどに英語教育に力を入れ、実践能力をつけていた。その英語教育に大きな影響力を発揮したのが初代校長小田堅立であった。小田は明治31年から大正3年まで15年11カ月の校長在職中に教諭としても教壇に立ち「Kobe Chronicle」を教材に授業をおこなっている。また外国人教師も明治34年から配置し終戦の昭和20年まで採用し続けてきたところからもいかに英語教育に力を入れてきたか、また英語が職業人育成のために必要であると考えてきたかが理解できる。以上のことから「県商」の英語教育と小田堅立の人柄と教育上の実績・功績等の一端を発表させていただきます。

ロマン・ロランの「序文」— 仏語版『出家とその弟子』への —

野村 勝美

倉田百三の『出家とその弟子』は1922年に英語版が出版され、同書に感動したフランスの文学者ロマン・ロランから絶賛する手紙が届いたのは1923年のことであった。それから9年後、1932年に同書は仏語版が出版された。百三がすでに41歳のときであった。ロランが同書に寄せた「序文」に今回じかにふれることができた。序文とその内容を紹介してみたい。また英語教育の重大さをあらためて確認したい。

広島高等師範学校入学試験英語問題にチャレンジ!

田中正道

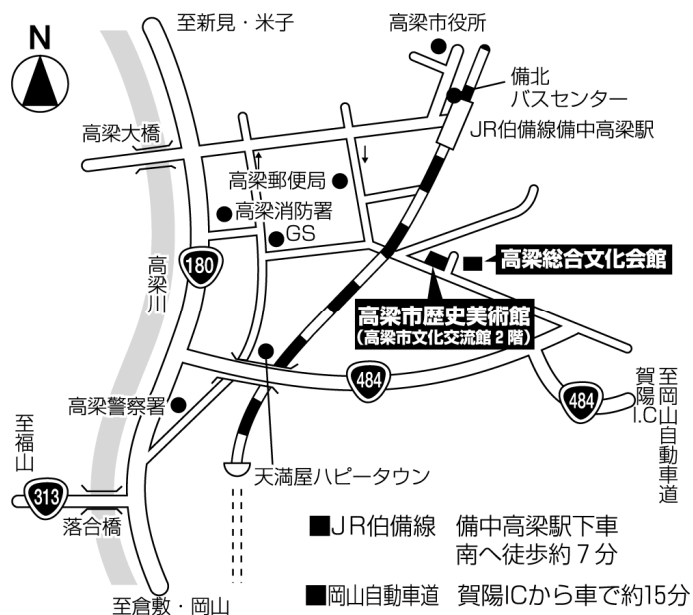
明治の後半、中学校(旧制)の数が増加、それに伴い中学校教員の需要が急増した。そうした状況下、明治35年に広島高等師範学校が設置され、第二次世界大戦敗戦まで教育の「西の総本山」の役割を担ってきた。発表者の手許には戦時色が強まった昭和初期の広島高等師範学校入学試験英語問題が10年分ある。本発表において問題形式、出題内容等の観点から英語問題の特徴を浮き彫りにしてみたい。

H. D. Leland に関する研究：岩国中学校での教育実践を中心に

保坂 芳男

明治33年岩国中学校は開校した。初代校長は橋本捨次郎である。彼は滋賀県尋常中学校の卒業である。そこで彼らに英語を教えていたのがH. D. Leland(1862-1941)である。その後アメリカに帰国し、牧師をやっていたのを橋本校長が岩国に呼び寄せた。Lelandは、その後約10年間岩国で英語教師を勤めることになる。今回の発表では、教え子の回想をもとに、Lelandの岩国中学での教育の様子を紹介したい。教え子のなかには、戦後最初の立命館大学の総長である末川博もいる。彼の随想集や、校友会会報、学校史の中からLelandに関するものを紹介し、いかに彼が生徒から愛されていたかを明らかにしたいと考えている。

交通のご案内



JR 備中高梁駅へは、JR 岡山駅より
伯備線 特急列車で約 35 分
普通列車で約 50 分

例会の翌日 12 月 13 日 (日) の午前中、
市内の史蹟見学 (備中松山城・高梁キリス
ト教会堂) を予定しています。

宿泊のご案内

高梁国際ホテル

高梁市正宗町 2033 TEL: 0866-21-0080 (シングル ¥7,350)

12 月 12 日 (土) の宿泊用にシングル 15 室を確保しています。高梁国際ホテルでの宿泊をご希望の方は、11 月 10 日 (火) までに事務局へお申し込みください。

メール umamoto@pu-hiroshima.ac.jp

電話 0824-74-1725 (研究室) / 090-1335-6933 (馬本携帯)

そのほか、高梁市内には、次のホテルもあります。こちらをご希望の方は、直接ホテルまでお申し込みください。

ビジネスホテル高梁 高梁市栄町 1943-5 TEL: 0866-22-6766 (シングル ¥5,000)

高梁例会のご出欠について

例会および懇親会のご出欠をお知らせください。同封の参加申込用紙の内容について、11 月末日までに、メール、ファックス、郵送のいずれかでご回答くださいますよう、お願いいたします。

事務局連絡先 メールアドレス: umamoto@pu-hiroshima.ac.jp

F A X 番 号: (0824) 74-1725

郵 送 先: 〒727-0023 広島県 庄原市七塚町 562 県立広島大学 馬本研究室内
日本英学史学会 中国・四国支部事務局

中国・四国支部ニュース

『英學史論叢』第13号原稿募集

中国・四国支部研究紀要『英學史論叢』第13号(2010年5月発行予定)の原稿を募集します。研究論考、研究ノート、英学史随想、英学史時評、書評等、会員の皆様の積極的なご投稿をお待ちしております。

・ご投稿に際しては、以下に掲載の「執筆要領」および「標準書式」に従ってください。

・投稿予定の方は「投稿申込」をお願いします。
2010年1月31日までに事務局へ、メール(umamoto@pu-hiroshima.ac.jp)、またはFAX(0824-74-1725)にてお申し込みください。

・原稿提出の締切は、**2010年2月20日**(消印有効)です。事務局まで郵送してください。

・研究論考・研究ノートへの投稿は、正副計3部をお送りください。英学史随想、書評等の原稿は1部お送りください。

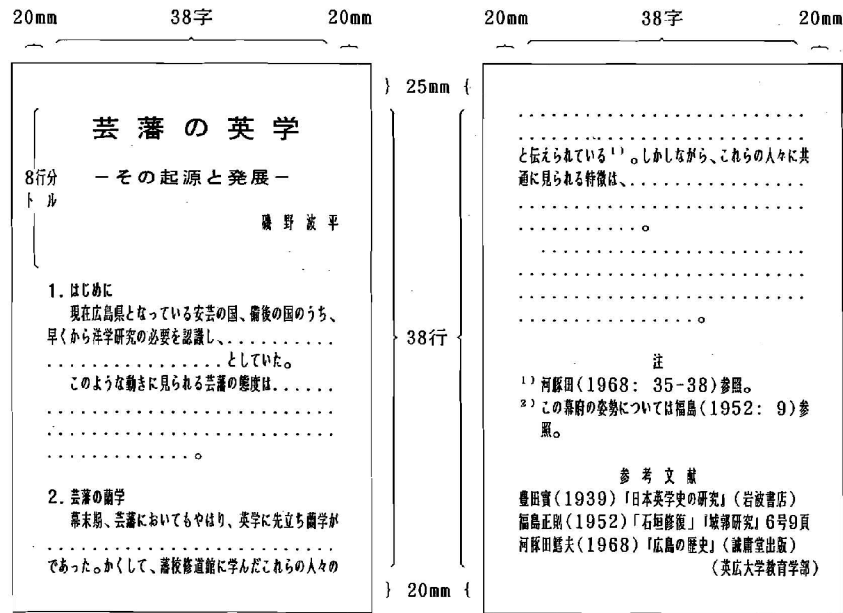
『英學史論叢』執筆要領

- ・『英學史論叢』に載録するものは研究論考・研究ノートおよびその他のものとする。いずれも未発表のものに限る。
- ・研究論考・研究ノート、その他のものとも、原則として提出されたものをそのまま複写印刷するものとする。手書き、タイプライターやワープロによる印刷など、いずれも標準書式に従った完全原稿を提出するものとし、執筆者による校正は行わない。用紙は白紙を用いるものとし、原稿用紙等罫線のはいたものは受理しないことがある。
- ・研究論考・研究ノートは日本英学史学会中国・四国支部研究例会、日本英学史学会本部月例会および年次大会、ならびに他支部研究例会における口頭発表をまとめたものとする。これによらない投稿論文も受理することがある。いずれも正副3通を提出し、編集委員会の査読を経て掲載の可否、書き直し等を決定するものとする。なお、編集委員会には必要に応じて編集委員以外の会員に査読を委嘱することができる。
- ・研究論考・研究ノートは参考文献・資料・図版等を含め、10ページ以内とする。
- ・掲載決定後の最終原稿はプリントアウトしたものと合わせ、電子媒体によるデジタルデータを提出することを原則とする。
- ・研究論考・研究ノートの掲載料は1編につき3,000円とする。ページ数を超過した場合は、1ページにつき1,000円の追加掲載料を負担するものとする。学生会員については、規定ページ数以内の場合は掲載料を免除する。
- ・その他のものについては、英学史随想、英学史時評、新刊書評・紹介等とする。これについては会員の投稿および事務局・編集部への執筆依頼によるものとする。なお、新刊書評・紹介は日本英学史学会中国・四国支部会員の著書ならびに中国・四国支部の活動に関わる著作を取り上げるものとする。英学史随想、英学史時評、新刊書評・紹介等、いずれも原則として2ページ以内とする。

『英學史論叢』標準書式

- ・用紙はB5判白紙を用い、上部に25mm、下部および左右に20mm、それぞれ余白をとる。
- ・本文は、10ポイントないし10.5ポイント文字を使用し、1行あたり38文字、1ページ38行の書式によって作成する。
- ・本文第1ページに8行分をとって論文タイトル、執筆者名を記す。論文タイトルは4倍角文字ないし18~20ポイント文字を使用し、中央に置く。執筆者名は本文と同じ大きさの文字を用いて、右に寄せて記す。なお、論文末に、右に寄せて、執筆者の所属をカッコに入れて示すこととする。
- ・本文中の見出しについては1行アキとし、番号を付して太字、あるいはゴシック体とするか、下線を施して見やすくする。
- ・注は、脚注、尾注のいずれも可とするが、本文中に右肩数字によって注のあることを明記する。
- ・参考文献、引用文献は論文末に一括して示す。
- ・英字・数字はすべて半角文字とする。

『英学史論叢』標準書式



英学史学会全国ニュース

日本英学史学会第46回全国大会

今年度の全国大会は、2009年10月10日(土)～11日(月) 明治学院大学白金キャンパス(東京都港区白金台)を会場に行われました。中国・四国支部所属会員による研究発表は次の通りです。

- ・松村幹男「雑誌『英語教育』について — 昭和戦前期英語教育史研究 — 」
- ・竹中龍範「J. M. Dixon『英和日本学校用会話』をめぐって」
- ・田邊祐司「日本英語音声教育史：杉森此馬の指導観」

日本英学史学会(本部)の会員登録には、中国・四国支部とは別に手続きが必要です(入会金2,000円、年会費5,000円)。

「日本英学史学会報」No.119

年3回発行されている「日本英学史学会報」No.119が発行されました(9月1日)。

内容： 史に聴けば 全国大会へ向けて
英学史的白金散歩

- ・『櫻の實の熟する時』を片手に
- ・岡目八目(平川英語 vs 岩崎英語) ほか

「日本英学史学会報」No.119には、支部活動報告

として、中国・四国支部平成21年度総会ならびに第1回(通算60回)研究例会報告、『英学史論叢』第12号目次などが掲載されています。

英学史情報ひろば

『日刊新周南』紙のコラム「つむじ風」(5月10日、8月6日付)河口昭先生が代表を務めておられる徳山英学会の活動について。五十嵐二郎先生による小学校英語教育の講演会の様子などが紹介されています。

広島英学史の周辺(26) ニューズレターが第60号の節目の号を迎えました。充実した例会プログラムを今号でお伝えできることを大変嬉しく思います。「キリスト教と日本の英学」の歴史を伝える高梁の地で、皆様とお会いできますことを楽しみにしています。(馬)

日本英学史学会 中国・四国支部ニューズレター No.60

2009年10月31日発行

発行 日本英学史学会中国・四国支部(代表 竹中龍範)

事務局 〒727-0023 広島県庄原市七塚町562

県立広島大学 馬本研究室内

電話&FAX: (0824) 74 - 1725 (直通)

e-mail: umamoto@pu-hiroshima.ac.jp

ホームページ <http://tom.edisc.jp/eigaku/>

郵便振替口座 01360-9-43877 日本英学史学会中国・四国支部

Newsletter No.60 October 31, 2009